

納谷 学・納谷 新 能代の住宅

2003年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

計意図があり、空間の構成にも、構造や設備や工法にも創意と工夫があることを念頭に置いてのことですが、そのことも含めて平面図にそれが顕れているところを発見したり、深読みしたりすることを、私はひそかな楽しみにしているのです。

というわけで、この「能代の住宅」も平面図から読み解こうとしていたわけですが、図面を仔細に眺めるうちに、平面構成に設計意図がストレートに表現されており、見ようによっては「直球過ぎる」ようにも感じられるこの平面図の「地の部分」(文章で言えば「行間」ということになるでしょうか)から、なんともいえない「おだやかさ」と「あたたかさ」が漂っているように感じました。「おだやかさ」は「くつろぎ」と言い換えても良いでしょうし、「あたたかさは、むしろ「ぬくもり」という言葉の方が適切かも知れません。年配のご夫婦が日常を過ごす2階の縦横無尽の動線計画(ちょっと、四つ葉のクローバーの縁を8の字に巡り歩くなイメージがあります)は、日々の暮らしに大いに役立ってくれそうですし、2階の居室を口の字型に取り囲む廻廊型の廊下は、各辺ごとに幅を変えて異なった性格を与えられています。ここも、住みつづけるうちに自然発生的にそれぞれの廊下ならではの使い方が生まれてきそう楽しみです。

また、1階のしかるべき場所には、東北の住宅らしく「漬け物」のためのスペースまでちゃんと確保されていて、この住宅が、能代という風土と生活習慣にしっかり根を下ろした設計であることが見て取れるのです。

この住宅には、縁側が座敷を取り巻く伝統的な日本家屋の気配が色濃く漂っている



ル・コルビュジエの「リボン・ウィンドウ」を連想させるファサードの横長窓

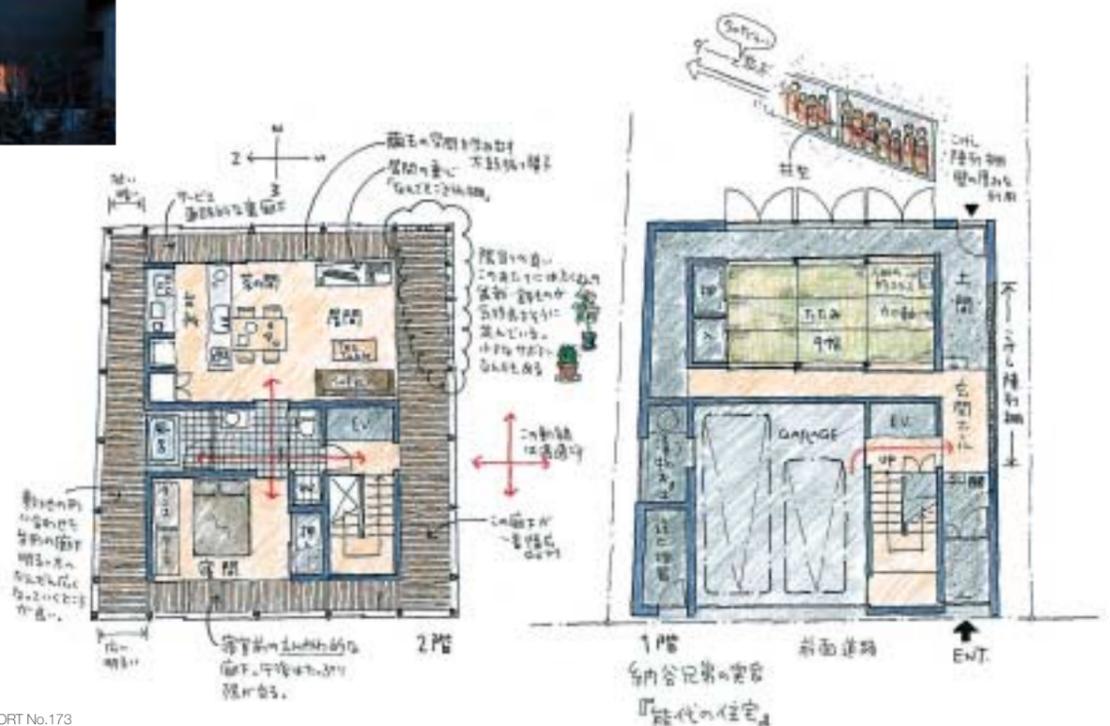
「実家」という言葉には、懐かしいような、甘酸っぱいような響きがありますね。また、どこかほろ苦い味わいもあるような気もします。この言葉を聞くと、私はガラにもなく胸の奥が「キュン」とします。私の場合、両親はとうの昔に亡くなっていますし、生まれ育った家ももうないので、なおさら強くそう感じるのかも知れません。

納谷兄弟の「能代の住宅」を初めて雑誌で見たとき、私はそれがおふたりの両親の住宅、つまり、「実家」であることに気づきませんでした。納谷兄弟はそのことをあえて伏せて発表していました。そういう内輪の話を抜きにして「この住宅をひとつの住宅作品として見て欲しい」と考えたのでしょう。

本や雑誌の頁で住宅を見ると、いつでも私は平面図を丹念に読みます。もしかしら写真に見入るよりも、平面図の方を長いこと眺めるタイプかも知れません。もちろん、その建築家ならではの計画を貫く独創的なアイデアや設



東側の立面。横長窓がじつはグルリと巡って「サークル・リボン・ウィンドウ」であることが分かる



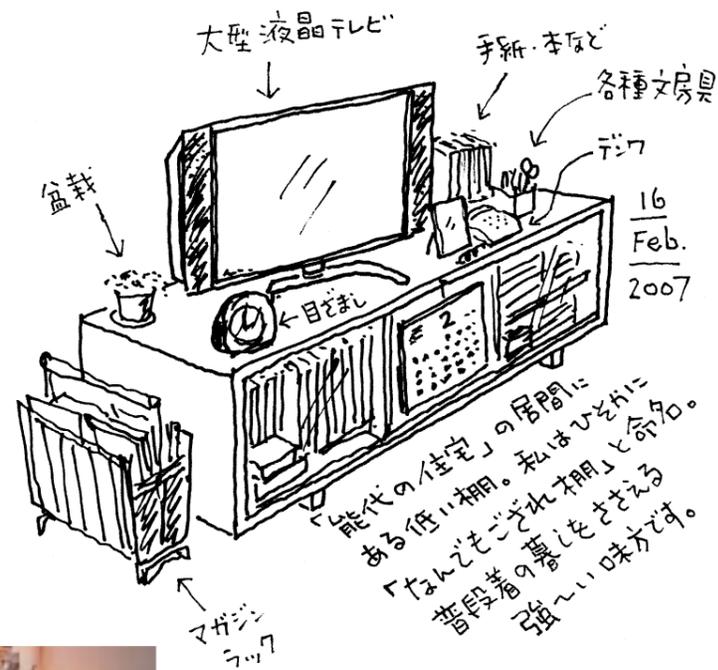
さあ、そうすると、やはりこの住宅を実際に自分の眼で見、その室内を8の字に巡り歩いてみたくなります。また、ご両親が、この一風変わった間取りの家に実際はどのように住んでおられるのか、興味しんしんでもあります。

さいわい納谷兄弟とはゆっくりお酒を飲み交わしたこともあり、私としては(片想いでなければ…)ちょっとした「なかよし」気分がありますので、さっそく連絡を取り、快諾を得ました。そして「東北なので、やはり雪の季節に見学させてもらうのがよかろう」と、トントン拍子に話は進み、昨年(2007年)2月、勇んで出掛けて行きました。

到着した秋田空港は見渡す限り一面の雪景色。低くたれ込めた鉛色の空からは粉雪が絶え間なく舞い降り、あたりは海の底のような静寂が支配していました。ダウンジャケットの襟元を掻き合わせ、マフラーを口元まで巻き直しながら、思わず「すんばれるなあ」と秋田訛りが出ました…というのはウソ。じつは、その日は雲間から薄日が射して拍子抜けするぐらいに暖かい日でした。

秋田空港から能代までは1時間あまりのドライブ。辿り着いた「能代の住宅」は、写真の印象よりひとまわりほど小ぶりに見え、そのことで周辺に対して「威張った感じ」が少しもなく好ましく感じられました。黒い外壁も、壁の上部をグルリ一周、サークル・リボン・ウィンドウとでも呼びたくなる横長窓を巡らした外観も、建築雑誌的にそれだけを切り離し、焦点を絞って見れば「作品然」としてはいますが、実際にはどこか小箱のような愛らしさがありました。たぶんご近所の人達はこの家の前を通っては「納谷さんところの息子さんは、東京に出て行って、兄弟ふたりして活躍しているそうだねえ」とのどかな能代方言で言い言っていることでしょう。

「愛らしい感じ」は玄関を入ったところにもありました。ドアを開けて一歩踏み込むと右手の壁にニッチ状の細長い棚が造り付けられてあり、そこに大小様々なこけしがズラリと並べて飾られています。



1階玄関ホールの見返し。左側の壁にニッチ状に「こけし陳列棚」が造り付けられている。「闘兵」の感じ、分かるでしょうか?

玄関からそのまま土間を抜けて庭側に出るときは、ちょっとした開霰式の気分が味わえる整列したこけしたち。こけしのコレクションは母上のご趣味だそうで、この棚は兄弟から母上への建築的なプレゼントだったことが分かります。

この家で、ご両親が日常生活のほとんどを過ごすのは2階です。おふたりの要望だったという「冬でも明るく開放的であること」や「コンパクトに暮らせること」は、2階に上がってひとあたり見まわただけで、水際立ったプランニングでサラリと実



障子を閉めると、居間はたちまち繭玉の内部のようになる。太鼓張り障子は断熱だけでなく光の演出効果も満点

現できていることが分かりました。そのことも特筆に値することですが、私はこの住宅がご両親によって完璧に「住みこなされている」ことにとっても強い印象を受けました。建築家の設計した住宅には、おうおうにして「住まわされている」気の毒な人たちが、「住みあぐねている」不幸な家族がいるものですが、納谷さんのご両親は、ご自分たちの住まい方のスタイルや生活のリズムをまったく崩さずに、建物に対して遠慮も我慢もせずマイペースで住みこなしていることが、はっきり感じられたのです。「悠々自適」という言葉はこういう暮らしぶりのことをいうのかもしれませんがね。

日当たりの良い2階南側の窓台や簀の子敷きの廻廊に、観葉植物やサボテンの植木鉢が気持ち良さそうに並んでいたり、居間のテレビ台にアルバムや建築専門誌（もちろん自慢の息子たちの作品が掲載されているものです）などの他に、日々の生活に必要なものや、そこにあると便利な文房具類など、こまごまとしたモノが置かれています。こうした光景から、ご両親の暮らしのくつろいだ気配と着実な生活感が漂ってきて、ほのぼのとした気分させられるのです。私は「普段着の住宅」という言葉が好きで自著のタイトルにしたことがあります。この家の住まい方の印象はまさに「普段着の住宅」そのものでした。

ころあいを見て、納谷さん兄弟が「さあ」といった感じで立ち上がると、父上は「おう、そうだな」と、即座にこれを受けて立ち上がり、来客にお茶を出すぐらいの気軽さで撮影用の部屋の片付けが始まりました。その手際のよいこと！、仕事の早

いこと！。納谷兄弟と父上は、まさに「阿吽の呼吸」で作業に没頭し、またたく間に居間から生活感も両親の気配もかき消え、あれよあれよという間に、綺麗さっぱり。

私はその鮮やかな変幻ぶりを狐につままれたような気持ちで眺めていました。



「小さな家」が実際に使われていたときの室内写真

そうそう、狐につままれたまま私の脳裡に記憶の襞^{ひだ}から一枚の写真が浮かび上がってきたことも書いておきましょう。

その写真は、室内の様子を撮った写真で、あのル・コルビュジエの設計した「小さな家」の室内に飾ってありました。ご存じの通り、レマン湖のほりにあるこの家はル・コルビュジエの母親の家としてよく知られていますが、写真は、その母親が、「小さな家」に暮らしていた当時撮影されたと思われる貴重な記録です。そして、私が瞠目したのは、室内の様子が、現在公開されている家の印象とはまるで違っており、なんともいえず「可愛いかった」ことです。飾り棚に飾ってある大小さまざまな品々も、床に敷かれている模様入りのカーペットも、刺繍の入った椅子のクッションも、花柄とおぼしきベッドカバーも、そのことごとくがスイスの「おぼあちゃん」の趣味で統一されていました。そこには、この建築が20世紀の建築史の中でも最も有名な住宅のひとつであることを感じさせるものは何ひとつありません。あるのは室内に漂っている人肌の温もりと穏やかな空気。ル・コルビュジエの母親は、あの「小さな家」の中に、いかにも自分好みの、自分らしい世界を築き上げて暮らしていたのです。一枚の写真から、私は建築家の作品と、そこに暮らす人の生活の関係について、あらためて考え直してみる機会を与えられたような気持ちになり、そのことを忘れないよう、神妙な気持ちでその写真をカメラにおさめたのでした。

「障子を閉めてみましょうか？」、納谷学さんはそう言い、居間を取り巻くすべての障子を閉めてくれました。そして、驚いたことに、たちまち居間は繭玉に変身しました。太鼓張りの障子を透過して自然光がほの明るく室内を照らし、頭から真綿の頭巾をスッポリかぶったような静寂が訪れました。私は、目の前にいる納谷さん兄弟がみるみるうちに幼い子供になり、両親が笑顔で見守る仲、仲良く繭玉の室内を遊び回っている情景をありありと瞼の裏に浮かべていました。*



アットホームな雰囲気でお話し込む納谷兄弟と私

なかむら・よしふみ—建築家/1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972~74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976~80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社 2000）、『意中の建築上・下』（新潮社 2005）などの著作がある。